第二章　光る源氏の物語　二条東院の女性たちの物語

［第一段　二条東院の末摘花を訪問］

*かうののしる馬車の音を（このように臨時客たちが帰る時に立てる馬や牛車を牽き立てる掛け声の賑やかさを）、もの隔てて聞きたまふ御方々は（塀越しに遠くお聞きになる夏の町の花散里や冬の町の明石御方たちは）、*蓮の中の世界に（極楽世界にあっても）、まだ開けざらむ心地もかくやと（まだ救いを待っている気持ちのようだと）、*心やましげなり（心も曇り勝ちのようでした）。　*「かう」と纏める描写記述が無い。というのは、「ののしるうまくるま」は臨時客が帰るときに従者が馬や牛車を追い立てる掛け声、かと思えるからだ。同様の帰り掛けの場面は既に何度か描かれているが、此処には宴がお開きになった記述が無く、脱稿が疑わしい。尤も斯かる場面の飛びも、この物語には何度もあることで、同様の「かう」の使い方も以前にも在った気がするが、こういう語りには馴れ様が無い。　*「はちすのなかのせかい」は仏教で言う＜極楽浄土＞のことらしい。生前の行いが良ければ、死後に地獄に落ちずに極楽に行ける、みたいな事だった気がするが、その「極楽世界」にも生前の行い次第で九段階の上下格差があって、下位で往生すると畜生道には落ちないものの、なかなか良い思いは出来ないらしい。注には「あけざらむここち」について＜極楽浄土世界中、九品の中の下品下生、最下級の世界。そこでは蓮の花が開くまでに十二大劫の期間を待たねばならない。＞と、良く分からないが随分と長く待ちそうに解説してある。　*「こころやまし」は＜物足りない、不満だ＞とあるが、「やまし」は＜病気に悩む＞ともあるので、何か問題があって＜気が晴れない＞と取る。

まして、東の院に離れたまへる御方々は（まして二条東院に離れ住んでいらっしゃる御妾妻の方々は）、年月に添へて、*つれづれの数のみまされど（年を追うごとに殿の訪れが無い日が増すばかりでしたが）、「*世の憂きめ見えぬ山路（いっそ念仏三昧を）」に思ひなずらへて（という古歌に模した気持ちになれば）、つれなき人の御心をば（薄情な殿の御心を敢えて）、*何とかは見たてまつりとがめむ（どうこうと思い責め申し致しましょうか、いえ致しますまい）。　*「つれづれ」は＜変わった事が無い日が続く＞ことらしく、それが＜誰の訪れも無く寂しい＞ということにもなるようだ。　*引句の参照歌は、注に＜「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」（古今集雑下、九五五、物部吉名）。＞とある。歌筋は「辛い憂き目に遭わぬよに出家暮らしに入るには愛しい人こそ邪魔になる」だから、この色っぽい言い回しこそがこの歌の味だろうし、酒席の都都逸みたいな印象だ。「古今和歌集の部屋」サイトの解説にもあるが、「物部吉名（もののべのよしな）」という名も洒落言めいているし、この歌は題詞に「同じ文字なきうた」とあるようで、事実同じ文字は使われていないという大喜利芸だ。　*「なにかは」の反語表現。

その他の心もとなく寂しきことはたなければ（その他の援助が不足して心細いということも特に無いので）、*行なひの方の人は（片方の尼僧になった空蝉の方は）、その紛れなく勤め（一心に念仏行を勤め）、仮名のよろづの草子の*学問、心に入れたまはむ人は（仮名文字のさまざまな書物の勉強に熱心なもう一方の末摘は）、また願ひに従ひ（またその思い通りの日課で）、*ものまめやかにはかばかしきおきてにも（事細かな日常生活の仕来たりに於いても）、ただ心の願ひに従ひたる住まひなり（それぞれの御方の考え方に任せた暮らしぶりです）。　*「おこなひ」は＜念仏行＞なので、それを行う人は出家した「空蝉」に違いない。気になるのは「かた」という言い方の方だ。「かた」は＜方向、口＞でもあるから＜出家した部類＞を意味するかも知れないが、二手に分けた＜片一方＞を示す指示代名詞かも知れ

ない。だとすると、この時点では「空蝉」と「末摘花」の二人だけが二条東院に住んでいる事の明示のようにも感じられる。 *「がくもん」は＜体系立てて深く追求した学識＞でこの時代なら漢学のことやその勉強方法のことを主に言ったのだろうから、注に＜『集成』は「「学問」と大げさに言うのは、例の、末摘花をからかった筆つき」と注す。＞とあるのも肯ける。「玉鬘」巻第五章第三段に「常陸の親王の書き置きたまへりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか、和歌の髄脳いと所狭う、病去るべきところ多かりしかば、もとよりおくれたる方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」と光君が末摘花を皮肉以外の何者も無く評していたことに重なる。 *「物まめやかに捗々しき掟て」は＜実際に事に当たって処理する遣り方＞だろうが、前項の＜御本人の日課＞に対するものとしては＜女房たちに指示する炊事や掃除や飾りつけなどの仕方や時間割についての生活上の取り決め＞かと思う。

騒がしき日ごろ過ぐして渡りたまへり（六条院での年始行事が一段落してから殿は此方にお越しになりました）。常陸宮の御方は（日立宮の御ゆかりの御方である末摘花は）、人のほどあれば（御身分があるので）、*心苦しく思して（殿は儀礼を尽くす責任をお感じになって）、人目の飾りばかりは（女房たちの手前の形ばかりには）、いとよくもてなしきこえたまふ（ちゃんと正式にお会いになって新年のご挨拶を申し上げなさいます）。 *「こころぐるし」は現代語でもある。古語辞典にある＜気の毒だ、いたわしい、申し訳ない＞も今に通じるが、逆に＜身に詰まされる、気詰まりだ、責任を感じる＞という今の意味も、もともと古語に有ったに違いない。しかも、此処の「こころぐるし」は「人のほどあれば」という理由が明示されている。そして、その＜身分が高い＞ことが＜気の毒だ＞や＜申し訳ない＞では、頓知問答でもない限り意味が成立しない。そして此処は頓知を遊ぶ場面では無い。末摘の設定からして、「ひとのほど」が示す＜高い身分＞は「王家血筋」のことで、「こころぐるし」は＜殿が皇族同士の身内意識＞から「姫に非礼を慎む責任」を感じている、のだと思う。で、此処の言い回しに「末摘花」という宮姫の命名の奥深さを改めて感じるので、繰り言かも知れないが改めてノートする。宮姫はオーベイで言うところのトナカイのような赤鼻だった。「あかなは」は「ベニバナ」で「紅花」。「紅花」はキク科植物で、染色用にテッペンの花を摘むと、その花が幾つもの花弁が集まった集合体で、一気に花を浚えることから「末摘花」の異名を持つ、と聞く。しかし、「すゑ」はテッペンだけではない。先端の境目はすべて「末」だ。「さかいめ」とは「キワ」である。誰も手をつけないキワモノも暗意する。「末摘」とは、そのキワモノを同類者の責任として世話する、という自負とも言えそうだ。いや無論、光君は決して王家の代表というわけでは無い。王家の代表は「ミカド」だ。しかし、国体を築く主体から国体保持の主体に変容した「ミカド」は、権威の象徴、集合の目印、求心力の体現、として存在しているので、実務上の力の管理者、政治統括者、なのではもはや無い。そうした最高管理者は豪族の代表であり、王の友であり、王の村であり、源平藤橘の臣下たちだった。だから実際、光君は失脚時には末摘を省みなかった。出来なかったし、する責務も無かった。が、政治家として復権したからは責任を果たさなければならない。と言っても、この責任は公務では無い。あくまで自負であり、自分の生き方として光君が持っている価値観だ。そして、この光君とは即ち作者の価値観によって、私は辛うじてこの王朝の女語りを此処まで読み進んで来られた。この末摘を何処まで惨めに描くのだろうかという作者への興味が無ければ、いくら暇つぶしと言ってもパンチが無さ過ぎる。最初に「末摘花」巻を読んだ時は、それまでの語りとは異質なほどの滑稽譚で、もしかすると江戸時代の戯作者あたりが書き足したのかとさえ思ったほどだが、作者が構成する光君の人物像を描くには不可欠な王家のキワを示す登場人物のように今は感じられる。実際に、私のような者がこの物語をいくらかでも手探れるのは、この人物の存在感、実在感、臨場感があってこそだ。この恐ろしいほどの現実感は、作者が書かずには居られない時代の変化を必ずや写しているのだろう。

いにしへ、盛りと見えし御若髪（おんわかがみ）も、年ごろに衰ひゆき（長い年月に衰えが進ん

で)、まして、*滝の淀み恥づかしげなる御かたはらめなどを(いよいよ見事な滝の白糸となった御横顔などを)、*いとほしと思せば(殿は醜態を見てしまうのを危惧なさって)、まほにも向かひたまはず(面と向かっては対座為さいません)。　*「たきのよどみ」は＜滝つぼ＞だろうか。「はづかしげ」は＜此方が気後れするほど相手が優れている様子＞だから、「滝の淀み恥づかしげなる」は＜滝つぼが気が引けるほど見事な勢いのある滝の流れ＞ということで、形容対象である「御かたはらめ(御横顔)」を窺わせる末摘の＜見事な総白髪＞を意味している、かと思う。ただ、もし＜滝つぼ自身がしょぼい見映えを気にする＞のだとしたら＜数本の白髪交じりで弱弱しく衰えた様＞も有るかと考えたが、やはり「はづかしげ」の語感は＜相手が優れている＞と取るべきなのだろう。しかし、だとすると末摘の年齢が気になる。確か明示は無い。「末摘花」巻で宮姫は従姉妹らしき大輔の命婦に子ども扱いされていたので、光君より年下かと思っていたが、当時光君は 19 歳で、大輔の命婦は父帝の召人だったのだから、光君の乳母子といっても相当に年上だったかも知れず、だとすれば宮姫も光君より年上だったのかも知れない。そう言えば、五年前の秋の東院落成当初から供寝をする間柄では無いとされており、抱く気になれないという内心の事情の他に、外形的にも昔は四十歳を老年と見て隔てたとすれば、末摘は光君より十歳近くも年上ということになるが、源典侍の例を見れば四十過ぎの女は絶対抱けないというものでもなさそうだし、大輔の命婦も末摘も光君より七歳上の御息所よりは歳下でないと、何となく全体の語り口調の整合性を欠く様に感じる。で、上下の何れにしても光君と五歳は離れては居ないだろうと見て、今現在で光君は 36 歳という設定のようだから、四歳上の 40 歳としても白髪混じりと言うならともかくも、総白髪とは随分な若白髪で、有り得なくは無いが、思い切った演出ではありそうだ。　*「いとほし」は度々ノートする。古語辞典には＜可哀相だ、気の毒だ＞または＜愛らしい、いじらしい＞と説明されている。しかし、この御方は源氏の君が＜可哀相だ、気の毒だ＞と客体視して思う対象では無い。勿論＜愛らしい＞年周りでは更に無い。この御方は光君にとって自分の属性を認識する対象であり、どんなに惨めでも決して見捨ててはいけないと自負し、そう在りたくない反面教師に見立てることも含めて、自己を客観評価するために見捨てられない人物なのである。言わば自己愛としての哀しい愛おしさだ。であれば場合によっては、その惨めさは冷静に分析すべき対象でもあり、いくら貶めても他人を愚弄する卑しさにはならない、とさえ言える。だから逆に、どうせ見捨てられないだけに、見るのが辛い時はせめて見ない権利は有る、と光君は庇護者の立場を自らは身勝手に思っている。と言ったような事情を鑑みれば、「いとほし」は＜気の毒だ、愛らしい＞の意味を取るのは限定的だと以前にもノートしたように、いかにも多様な場面で多用される語なのだから、此処でもやはり原義らしきものは押さえたい。そこで今回も「いとほし」を＜「厭ふ」＋「をし(惜し)」＞みたいに考えて、＜嫌うに忍びない→嫌悪が予期されて回避したい＞辺りに見当を付けようかと思う。

*柳は、げにこそ*すさまじかりけれと見ゆるも(柳重ねの晴れ着がこれほど華やぎの無い物に思われるのも)、*着なしたまへる*人からなるべし(この方の着こなしていらっしゃる格好の所為なのでしょう)。*光もなく黒き掻練の(くすんだ色合いの黒い下着の柔らかい生地を)、*さゐさゐしく*張りたる*一襲(衣擦れがざわざわと音が立つほど堅く糊付けしたものをたった一枚下に着ただけで)、さる織物の袿着たまへる(その晴れ着を着ていらっしゃるのは)、いと寒げに心苦し(とても寒そうで見るに忍びません)。*襲の衣などは(重ね着に仕立てるように晴れ着と一緒に贈った下着用の白い生地は)、いかにしなしたるにかあらむ(如何してしまったと言うのでしょう)。　*「玉鬘」巻末章の「歳末の衣配り」で「かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほほ笑まれたまふ。」とあった。「柳の織物」は緑色系の明るい晴れ着で若々しく、「いとなまめきたれば」如何にもこの人には似合わなそうだと思ったから、殿は「人知れずほほ笑まれたまふ」た、という記事だ。何れ用意されていた晴れ着は華やかなものばかりで、どれを選んでも末摘に相応しいものは無かったのかも知れないし、「衣配り」の場面でも行き掛かり上でそういう分配になったような書き方には成っていたが、どんな

設定でも作者の思うままであることは言うまでも無く、際立つ演出ではあるのだろう。　*「すさまじ」は＜荒涼としている＞。　*「着なす」は単に「着る」ことを意味するのでは無く、＜着こなす＞のであり＜一定の形に着付けている＞ことを意味する、のだろう。　*「ひとから」の「から」は理由の格助詞ではない、と思う。「から」は「柄」という接尾語で前語の＜性質、状態、形態＞を意味している、とある。つまり、「ひとから」は＜人の状態＞であって、この場合は＜晴れ着を着こなしていらっしゃる人の格好→その人の着付けている型＞を意味し、個体識別の属性を示す＜人柄＞では無いので「御」がつかない、に違い無い。そして、その具体描写が以下に続くと言う語り口だ。　*「ひかり」ある「黒き掻練」なら、色っぽいのかも知れない。　*「さゐさゐし」は＜ざわざわと音が立つ＞とある。衣擦れが殊更大きく鳴ったのだろう。　*「張る」は「貼る」で、与謝野訳文に「糊気の強い」とあるのに従う。折角の掻練の柔らかい下着が堅くては痛々しい。「張る」のは本来なら、着付けで緩まないようにしっかり押さえるべきなのだろう。*「一襲(ひとかさね)」は＜重ね着の一枚＞。そこに「さる織物の袿着たまへる」とあるから、「ひとかさね」が＜たった一枚の内着に＞を意味することになる。なお、「袿」は「うちき」と発音しても「内着」ではなく上着であり、此処では＜正月晴れ着＞を指すもので、「うちき」は本正装の飾り掛け着である「唐衣」に対する言い方のようだ。紛らわしいので「内着」は＜下着＞と言い換えたが、その下に肌着は着ていたかも知れない。　*「かさねのきぬ」が晴れ着と一緒に贈られたと言う記事は無い。また、そうした下着類は日用品であり、特に同時に贈らなくても当然に日頃から何枚かは所持している筈で、着付けの常識として其等を重ね着しないとは「如何に為なしたるにか」と驚きをもって言う、というのも合理的だ。しかし、より驚きを強調する解釈として「きぬ」を＜生地＞と取って、同時に贈られたとする与謝野訳文に従う。

*御鼻の色ばかり(そのくせ、お鼻の色だけは春を盛りのお花のように)、霞にも紛るまじうはなやかなるに(霞にも紛れそうも無いように華やかに目立っているので)、*御心にもあらずうち嘆かれたまひて(殿は思わず失望の溜め息をお吐きなさって)、ことさらに御几帳引きつくろひ隔てたまふ(ことさらに御几帳の垂れ布の隙間を直して目塞ぎなさいます)。　*「御鼻」は「みはな」の読みとされている。「御」の読みは「お」なのか「ご」なのか「ぎょ」なのか「み」なのか「おん」なのか「おほん」なのか、実は全く分からない。注に＜「花」に「鼻」を掛ける。＞とあり、尤もかと思いこの際はっきり明示して言い換えた。*「こころにもあらず」は＜不本意にも＞よりは＜思いがけず＞かと思うので、これは＜見たくないものを見てしまった後悔＞ではないだろう。本当に見たくなかったら見ない。悪い予感があるものの期待や興味があって、つい見てしまったが、期待は裏切られて悪い予感が的中したという＜失望感＞かと思う。尤も悪い予感と言っても、赤鼻は生来の形状で病気や怪我で一時的に現れた症状ではないのだから、そうでない事を望むのは奇跡を待つようなもので、実際は押さえ難い興味だったのだろうから、実感としては＜見なければ良かった＞と言う後悔を覚えたのかも知れない。それでも＜押さえ難い興味＞が有った事は否定できないので、客観的に見て＜失望＞だ。

*なかなか(ところがどうも)、女は*さしも思したらず(御方は女心にその殿の隔てを然程は気になさっていらっしゃいません。)、　*「なかなか」は前文や前言に反意する時に言い出す副詞で＜かえって、むしろ＞と古語辞典に説明されるが、この語は丸々現代語でもあり、前文での思考に対して＜どうもそうは思うように行かないもので＞という道半ばでの感慨ぐらいが一般的な意味かと思う。だから、実際の言い換えは下文の反論の中身の、全否定や部分否定や視点替えや条件替えなどに沿って＜いやいや、しかし、かえって、むしろ、もちろん＞などと使い分けることになるのだろう。此処では＜ところが＞が良さそうだ。　*「さしも」は＜それほどには＞という副詞で、殿が「御几帳引きつくろひ隔てたまふ」た事を＜然程大した事には＞と言う意味になりそうだ。また、「おぼしたり」の「たり」は状態継続を示す助動詞で、「思したらず」は＜お思いではない＞という「思い」の否定ではなく＜お思いになってはいない＞という「状態」の否定。

今は、かく*あはれに長き御心のほどを(今はこのように身内として長く変わらずにお世話下さる殿の御心といったものを)、*おだしきものにうちとけ頼みきこえたまへる御さま(穏やかなものと親しんで信頼申していらっしゃる御様子の)、*あはれなり(思いがすれ違う孤独さは何とも物悲しいものです)。　*「あはれにながき」の「あはれ」は名詞で、「長し(長い間変わらず続いている、という意味の形容詞)」とされる事柄の関係性を示している。名詞「あはれ」は＜感動、愛情、風情＞と説明されているが、関係性で言うなら＜男女の情＞だ。ただし、情交は復権後は無さそうで、失脚前も18歳の冬に勇み足で過ってから、王族の責任感から面倒を見る覚悟はしたようだが、実際に複数回同衾したものかさえ不明だ。とすると、光君の意識としては＜男女の情＞ではなく＜同族の情＞のようだが、「あはれ」の語感と客観的な関係性を表すとしたら＜身内の世話＞あたりだろうか。　*「おだし」は＜穏やか、落ち着いている、安らかだ＞と古語辞典にある。もしかすると、殿が「御几帳引きつくろひ」給ふたことを＜礼儀正しい＞とか思ったりしたのかも知れない。　*「あはれなり」は形容動詞の一言だから、形の上では語り手の言い切りだ。とすれば、互いの思い違いを語ったのだから、少なくとも御方の女心の孤独性を言ってはいそうだ。しかし、この「あはれ」に光君の思いを感じない読者は居ないだろう。というか、私は感じる。私は作者の意図を、この御方に光君の王族たる一面を体現させていると思うので、もし光君自身が作者の意図どおりにこの御方に自らの一面を投影して見て、その容姿と言動とこの女心の孤独さとの全てに「あはれ(ああ我もこうした一面があるのか)」と思ったとしたなら、この「あはれなり」は実に印象深い一文だ。そして、次の一文をその事の明示かと思って読んでいると、「ありがたし」の違和感に驚く。

かかる方にも(このような人にも)、おしなべての人ならず(並みの身分ではない)、*いとほしく悲しき人の御さまに思せば(同情できる守るべき御事情にお思いになって)、*あはれに、我だにこそはと(身内意識からせめて自分だけでもと)、御心とどめたまへるも(これほどまでに優れていらっしゃる殿が、この御方をお気に留めていらっしゃるというのも)、*ありがたきぞかし(全く何とも真に尊いというものです)。　*「いとほしくかなし」はざっくりと＜愛しくて可哀相＞というよりは＜可哀相で愛しい＞に見える。が、何れこの御方が＜可愛らしい＞人でないことは確かだ。で、少しこだわれば、「いとほし」の重心は「惜し」で、御方が親に早く死に別れた事情から殿が寄せ得る＜その遺失感への同情＞。「かなし」は「予ぬ(かぬ、行く先を案じる)」＋「為す(なす、特にそうする)」くらいに見当を付けて、同族の誼で殿が背負う＜庇護すべき責任感＞。くらいだろうか。此処に、創業者は過去を背負わないが、継承者は過去を背負うという負担感から破壊願望が潜んでいる、とまで見るのは穿ち過ぎか。　*「あはれに」を＜身内意識から＞と言ってしまうのは意訳に過ぎる嫌いはある。しかし、私には＜情け深さから＞などとはとても言えない。　*「ありがたし」は＜またとなく尊い＞とある。私は初め、「何じゃそりゃ！」と驚いた。この光君の世話焼きを＜尊い＞などと位置付ける設定は、この作者に有ろう筈がないと思っていたからだ。が、それは直ぐに納得できた。この「ありがたし」は「ぞかし」という殊更に強意を示す大仰な言い回しとなっていて、語り手の冗談であることが知れたからだ。そこで、言い換えも「みこころ」から誇張して補語する大仰さにした。

御声なども(御方はお声も)、いと寒げに(それは寒そうに)、うちわななきつつ語らひきこえたまふ(唇を震わせながらお応え申しなさいます)。見わづらひたまひて(殿は見かねなさって)、

「*御衣どもの事など(衣服一揃えの組み合わせについての)、後見きこゆる人は*はべりや(担当の者は何処に居るのか出て来なさい)。かく心やすき御住まひは(こうした社交上の客も無い長閑な家では)、ただいと*うちとけたるさまに(先ず第一に暖かくして寛げるように)、*含みなえ

たるこそよけれ(重ね着するように柔らかい内着を何枚も用意するのが良いのです)。うはべばかりつくろひたる御よそひは(外見の体裁を取り繕った組み合わせ一式の御着付けは)、あいなくなむ(間違いです)」　*「おんぞども」と複数なので＜衣服の一式ないし一揃え＞を言うのだろう。　*「はべりや」は＜居ますか＞だが、衣服担当の係りを決めてあるかどうかなら決めてあるに決まっているので、この＜居ますか＞は＜今ここに居ますか＞であり＜出て来なさい＞であり、詰まりは御方と側近に対する叱責である。だから、以下の殿の言葉は直接は側近の女房たちに向けられたのであり、本当に女房たちの方を向いて本気で叱責したのかもしれないほど、この御方の取り巻きに問題があるらしい記事は「末摘花」巻や「蓬生」巻にもあった。それでも立場上の外形性からしても、その女房たちの主人たる御方の逃れようも無い管理責任を責めているのであり、実に此処に述べられたように御本人の意固地さも相当なもので、本意は御方に対する非難であることは間違い無い。　*「打ち解く」は＜親しむ、くつろぐ＞だが、「いと寒げに」を受けた衣服用意についての注意事項なのだから＜暖かくして休めるように＞という意味、かと思う。　*「ふくむ」は＜膨らんでいる＞とあり、「萎ゆ」は＜萎れる＞だが＜衣服の糊が落ちて柔らかくなる＞ともあるので、「含み萎ゆ」で＜ふっくらとやわらかい＞という布の状態に見えがちだが、此処では＜衣服一式の組み合わせ＞が話題なので、この「ふくむ」は外見上の＜着膨れ＞のことで、御方が＜何枚も重ね着をする＞ことを言っている、と思う。また、「萎ゆ」は＜力が抜けてぐったりする＞ともあるが、それは＜気力を失う＞ことに寄る事を言うようで、＜リキまずにくつろぐ＞ことでは無いようなので、「なえたる」を＜休んでいる＞と御方の状態を示すようには言い難く、此方はやはり＜柔らかい布＞を示す連体止めなのだろう。つまり、飽くまでも此処の話題は衣類の組み合わせの＜一式を取り揃えて置く用意＞のことなので、「ふくみ」を＜御方が何枚も重ね着すること＞と考えても、「たる」は＜そうなるように用意する＞ことを殿が女房に指示する、ということを表す構文だ。で、「ふくみなえたる」は＜重ね着用に萎えた衣を数枚用意すること＞を意味する。

と聞こえたまへば(と申し上げなさると)、*こちごちしくさすがに笑ひたまひて(この殿の女房への叱責に御方はぎこちなく庇うように愛想笑いなさって)、　*「こちごちし」は「骨骨し」とあり＜無作法だ、ぶしつけだ、無骨だ＞と大辞泉にあるが、訳文にある＜ぎこちなく＞に従う。というのはこの文が、御方は世間慣れしていないので＜世辞に疎くぎこちない＞という、御方の言動全般に於ける傾向を示す「さすがに」に加えて、殿の叱責は外形上は女房へ向けられたものなので＜殿には女房に代わって陳謝し、女房には殿に代わって指導する＞という管理者としての立場を御方は「さすがに」自覚して応答しながらも、実は殿の叱責が御方自身への非難であることを＜世辞に疎い＞とはいえ「さすがに」気付いて＜本質的には自分自身が申し開きしなければならない＞事態に狼狽して＜ぎこちなく女房の言い訳を代弁する言動＞になった、という描写に見えるからだ。となると、「さすがに」は＜何か問題があってそれを取り繕う場面＞という負の文脈に於いて使われる副詞で、その対象者に問題解決能力がある場合は＜しかし立派に＞と反転正意し、能力が無いと＜それで残念に＞と追加負意する、のだろうと思えるが、此処では上記の如く部分正反と全体負加を含意させているように思えて、その中で最も分かりやすい外形上の＜女房を庇う＞という言い方を選んだ。

「*醍醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて(醍醐寺のアザリである御坊様が年末に見えたのでその御接待をしなければならなくなって)、*衣どももえ縫ひはべらでなむ(女房たちは重ね着の仕立てまで手が回らなかったのでしょう)。*皮衣をさへ取られにし後(御坊様に毛皮まで持って帰られてしまいましたので)、寒くはべる(寒う御座います)」　*「だいご」は伏見の醍醐寺。注には＜「醍醐の阿闍梨」は末摘花の兄。「蓬生」巻に「御兄の禅師の君(おんせうとのぜんじのきみ)」と初出。＞とある。「禅師」は＜座禅で一定の境地に達した修行僧＞らしい。「あざり、あじゃり」は指導僧、模範僧の敬称とあり、一定の修行に達した高僧の称号でもあるらしい。良く分からない世界の話だ。「扱ひ」は＜世話焼き＞とあるが、ま

さか御方の女房が醍醐寺まで出向いて御坊様の御世話をする筈は無いので、「おんあつかひ」は歳末に東院に訪れた御坊様の＜御接待＞なのだろう。「しはべる」は＜～する用事がある→しなければならない＞と解す。　*「きぬども」は殿の「含み」を受けているので＜重ね着の衣類＞。　*「かはぎぬ」は「末摘花」巻で光君 18 歳の冬の雪の日の朝の、遂に宮姫の不細工を白日の下に見てしまった時に、「表着には（うはぎには）黒貂（フルキ、クロテンの外来語）の皮衣、いときよらに香ばしきを着たまへり。」とあったもののようだ。二十年近く前の話で、その時点でも故父宮からの数年前の賜り物だっただろうと言う年代ものである。毛皮は大事に手入れすれば長持ちするだろうが、それも良質な油脂や蝋でもあればのことで、二十年もたてば相当にクタビレていただろう。

と聞こえたまふは（と持ち出しなさったのは）、いと鼻赤き御兄なりけり（これまた鼻の赤い兄君のことなのです）。*心うつくしといひながら（他愛無い言い訳とは言いながら）、あまりうちとけ過ぎたりと思せど（あまりにも子供じみた言い方と殿はお思いになったが）、ここにては（むしろこの際は）、いとまめにきすくの人にておはす（バカ正直者としてお応えなさいます）。　*「こころうつくし」は古語辞典に＜かわいらしい感じで素直である＞、大辞林に＜無邪気だ＞とあり、少なくとも「心悪し（意地悪い）」や「心憎し（計算高い）」ではないコトの形容ではありそうだ。では、そのコトとは何か。それは、外形上は女房の事情を説明することで、内実は自分の立場を取り繕おうとした御方の「言い訳」に他ならない。御方に嘘を吐く器量は無いので、兄君の来訪は実際に歳末にあったのだろう。というか、いくらかでも言い訳の足しになりそうな客らしい客はその御坊様ぐらいだったのだろう。しかし、接待は一日のそれも数時間の奉仕に過ぎない。準備と言っても、御坊様相手なら質素なもので、高が知れている。それに引き換え、着物の仕立てそれも数枚分ともなれば根を詰めての数日掛かりの仕事である。仮に人手不足で針子が給仕に回ったとしても、一時的な座離れでしか無い。何れ、日常の応対と正月晴れ着の準備立てでは女房仕事の項目が別であり、そも互いに比較対象では無い。だから、御方の話は殿が指摘した＜着付けの常識の欠如＞に対する「言い訳」になっていない。つまり、殿はその「言い訳」を＜ツメの甘い子供じみた話→些かの緊張感も無い論理→「あまりうちとけ過ぎたり」＞と感じた。が、その御方が持ち出した話題自体にも気になるところがあるので、この際あえて「いとまめに（その逐一に）」言及する「きすくの人（生真面目な人）」として応対することにした、という文筋らしい。やはり末摘譚は落語調だ。

「皮衣はいとよし（毛皮はそれで良いのです）。山伏の*蓑代衣に譲りたまひて*あへなむ（山伏の蓑の代わりの雨具に御譲りなされば丁度良いでしょう）。　*「みのしろごろも」は＜蓑がわりの雨具＞とある。「蓑」は茅（カヤ）や藁（ワラ）などのイネ科の保温性のある中空茎を編んで肩から羽織る雨除け、だから、「蓑代衣」はその他の素材による雨具の総称らしいが、如何にもそのまんまの名称で、とっさの雨に手近なものを合羽代わりにしたような語感だ。　*「あふ」は「合ふ」か「敢ふ」で＜丁度良く役に立つ＞くらいに聞こえる。

さて（それは然て置き）、この*いたはりなき白妙の衣は（そうしたごく普段着の柔らかい布は）、七重にも（こんな寒い折には七枚にも重ねて）、などか重ねたまはざらむ（お召しにならないで如何するのです）。　*「いたはりなき」は＜特に大切にするほどでも無い＞ではあるだろうが、「いた」く「はり」の「なき」が＜すっかり糊を落とした柔らかい＞という意味で「しろたへのきぬ」に洒落て掛かっている、とは考えられないだろうか。そうすれば殿の前言にあった「含みなえたるこそよけれ」に通じるし、そうでなくても「しろたへの」は「きぬ」に掛かる枕詞だから、是は歌詠み心での洒落た言い回しには違いない。「白妙」の「しろ」は＜無垢の神聖さ＞を示すこともあるが、＜特に特徴の無いこと＞を示すこともある。此処では後者。「たへ」は「妙」なら＜優れている、趣がある＞という形容だが、「栲」ならコウゾなどの植物繊維またはその織物のことらしい。

さるべき折々は(生地が必要な時は)、うち忘れたらむことも、おどろかしたまへかし(私が不足に気付かずに居ることもあるので、貴方の方から知らせて下さい)。もとより*おれおれしく(元々私は愚鈍なので)、たゆき心のおこたりに(緩んだ気持ちで怠けているままに、)。まして方々の紛はしき*競ひにも(まして今回の衣配りのように他の方たちとの似たような比べ合いがあると)、*おのづからなむ(どうしても行き届かないことになりがちです)」　*「おれおれし」は＜愚かしい、愚かだ＞と古語辞典にある。　*「競ひ」は「きそひ」ではなく「きほひ」と振り仮名される。意味は＜競争＞でもあるのだろうが、むしろ＜競い合うように事が起こる、その勢い＞と古語辞典に説明されている。また、動詞の「きほふ」は＜競う＞だが、＜互いに張り合う＞ともあり＜互いに比べ合う＞でもありそうだ。となると、「方々の紛はしき競ひ」は「歳末の衣配り」を指しているように見える。だとすれば、この御方に対して「紛はしき」は思い遣りなのか嫌味なのか、何れ少し癖のある言い方に見える。　*「おのづからなむ」は「おのづから(さもあり)なむ」と解す。

とのたまひて(と仰って)、*向かひの院の御倉開けさせたまひて(従者に向かいの二条本院の倉庫を開けさせなさって)、*絹、綾などたてまつらせたまふ(絹や綾の織物を御方に差し上げさせて贈りなさいました)。　*「むかひのゐんのみくら」は＜二条院の御倉。＞と注にある。　*「きぬおりもの」が経糸緯糸の交差点を正方に織った平織物、「あやおりもの」が交差点を斜めにずらして織って文様を出す斜織物。

荒れたる所もなけれど(手入れが行き届かずに荒れたといった所は無いが)、住みたまはぬ所のけはひは静かにて(殿がお暮らしになっていないこの邸の気配は人気が少なく静かで)、御前の木立ばかりぞいとおもしろく(お庭先の木立ばかりがたいそう風情があって)、紅梅の咲き出でたる匂ひなど(紅梅の咲き出した色艶などを)、見はやす人もなきを見わたしたまひて(見てほめる人も無い景色を見渡しなさって)、

「ふるさとの春の梢に訪ね来て、世の常ならぬ花を見るかな」(和歌 23-06)

「怖さ見たさに明るい春に、蔵の暗さを垣間見る」(意訳 23-06)

*注に＜源氏の独詠歌。「花」に「鼻」を掛ける。久し振りに二条東院を訪れて、その女主人の相変わらぬさまに懐かしさと嫌気を感じて詠んだ歌。＞とある。「梢」は「こずゑ」で＜《木の末の意》木の幹や枝の先。木の先端。木末(こぬれ)。＞と大辞泉にある。殿の二条院および東院の位置付け認識が窺える言い方。キワモノだが、自分の一部。取り敢えずはメリハリだ。酸いも甘いも噛み分ける、とも言えそうだが、経験豊富で世事に通じている、と言うよりは、所詮は雲上世界の事では有る訳なので、不幸を知るほど幸を深く感じる、という振り幅と取りたい。Things got to get, just a little bit salty, to let you know that you are still around.

と独りごちたまへど(と殿は独り言を仰ったが)、聞き知りたまはざりけむかし(御方が聞き知りなさることは無かったようです)。

[第二段　続いて空蝉を訪問]

空蝉の*尼衣にも(かつて殿が十七歳の夏にもぬけの殻の薄衣を掴まされて空蝉と慕い申した

御方が今は未亡人として尼衣の出家姿で暮らす御部屋にも)、さしのぞきたまへり(殿はお立ち寄りなさいました)。　*「あまごろも」の語用は、「空蝉」巻に於いて殿が伊予介の人妻であった御方の寝所に夜這い入った時に気付かれて逃げられ、代わりに伊予介娘の軒端荻を抱いた後に、帰り際に「かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣を取りて出でたまひぬ。」とあった、「うすごろも」に対比させている、のだろう。さらに殿は、そのまま二条院に帰ってからも「ありつる小袿を、さすがに、御衣の下に引き入れて、大殿籠もれり。」という執心ぶりで、その思いのまま「空蝉の 身をかへてける 木のもとに なほ人がらの なつかしきかな (和歌 3-1)」という「空蝉」命名に結び為す独詠歌を、「御文にはあらで、畳紙に手習のやうに書きすさびたまふ。」と記されていた。そして、「玉鬘」巻の歳末の衣配りに於いては「空蝉の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梔子の御衣、聴し色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。げに、似ついたる見むの御心なりけり。」という、殿の執念深さが明記されていた。作者はこの「あまごろも」という言い方に、その殿の万感の思いを表現しようとした、ようにも思える。

*うけばりたるさまにはあらず(御方は特には正月飾りに気負いを見せる風でも無く)、*かごやかに局住みにしなして(自身は相変わらず隠れるように小部屋の片隅住まいをして)、仏ばかりに所得させたてまつりて(部屋の中央の大部分を仏壇にして)、行なひ勤めけるさまあはれに見えて(念仏行に明け暮れている日々が偲ばれるようで)、経、仏の御飾り(経巻やお供え物)、はかなくしたる*閼伽の具なども(簡素なつくりのそれらの器なども)、をかしげになまめかしう(風情があって優美で)、なほ心ばせありと見ゆる人のけはひなり(やはり慎み深い人柄と思わせる部屋の雰囲気でした)。　*「うけばる」は「受け張る」と表記され＜事を一手に引き受けて行う。他に憚ること無く振舞う。我が物顔に振舞う。でしゃばる。＞と古語辞典に説明されている。ということは、源氏家本体の六条院引越後に空蝉は西の対か北殿の管理経営を任されていたのかも知れない。しかし殿の引越後の二条院の部屋割りが変わったにしても変わらないにしても、二条院および東院の役割は以前とは必ず意味が違ってくるが、その説明に一切言及が無く仔細不明なるが故に、散逸脱稿が強く疑われる所でもある。だから一つの可能性としては、話の運びから類推すると、花散里に代わって末摘花が東院の総代に収まって東の対か西の対に住んでいた、とも考えられる。が、かの人およびその取り巻きにその器量があるのかどうかは甚だ疑わしい。また、空蝉に何れかの対屋を預けるというのも、確か警察官僚の中納言の家格の娘だったかと思うが、如何せん早くに親に死に別れてその威光に与れず、地方官に嫁いだ経歴という身の上からしても、且つ殿との表向きの関係性からしても、その任に然程は相応しく思えない。と考えてみると、二条本院は殿の成人後の実質での本拠地であったことから、六条院に移った今でも自分自身の旧家という懐かしさで大事に思ったかも知れないが、東院の位置付けは子息と花散里が居なくなった事の意味が相当に大きく、何か新たな発見が期待できる場所では最早無くして、過去の帳尻合わせの決算を担う役割になっていた、とも考えられる。因みに、二条東院落成時の記述を「松風」巻冒頭に振り返れば、「東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにし置かせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにても、あはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人びと集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見所ありてこまかなる。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さるかたなる御しつらひどもし置かせたまへり。」とあった。したがって当初は、末摘花も空蝉も「かりにても、あはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人びと」として北の対に局住まいをしていた、ワケだ。また明石御方は、実際には東院には移り住まなかったので、正殿とともに東の対も客間として空いていた、ことになる。ただ、子息の大学寮の入学祝いに東院東の対が会場として設営された、という記事は「少女」巻にあった。その後、子息は東院住まいで勉強に励んだということだが、その部屋が東の対なのか正殿の一角なのかは明記が無かったかと思うが、正殿はあくまで殿の間であったとすれば、

東の対の可能性が高い。皇太子の東宮に準えた演出だとすれば、正殿も有り得るが、東院東対という畳み掛けも面白い。何れ、その子息が去った東院の役割は、誰にとっても明確な機能を失ったように見える。となると、殿は末摘の侍女に「かく心やすき御住まひ」とこの東院の位置付けを説明しているので、今や花散里に代わる現場の指揮者は居らず、全くの私的な別邸として以前と同様の部屋割りのまま、家司が殿の意向を伺い立てて運営していたという実態だったのかも知れない。　*「かごやか」は「かごか」に同じとある。「かごか」は＜周囲を物に囲まれていて、もの静かなさま。ひっそりとしたさま。かごやか。＞と大辞泉にある。「囲まれる」か「隠れる」か、また別の語原からなのかは不明らしく、何れの漢字表記も無い。また、「つぼねずみ」は上臈の中でも筆頭女房などが母屋近くの小部屋を専用個室として住まいとすること、とあるが、元々空蝉は北の対で局住みをしていた筈なので、母屋の管理を任されても相変わらずの暮らしぶりだった、ということかも知れない。　*「あかのぐ」については、「閼伽」が＜仏へのお供え物＞で「具」が＜容器＞なので、「経、仏の御飾り」を供え物の中身と解した。ただ、「閼伽」は供え物の中でも特に＜水差し、水入れ＞を指す場合があるとも説明されるので、この「閼伽の具」は他の供え物とは別の＜水入れ、生花＞なのかも知れない。

*青鈍の几帳、心ばへをかしきに（青ねずの帷子の面白い柄の几帳の陰に）、いたくゐ隠れて（御方は同じ青ねずの出家姿ですっかり身を隠して）、袖口ばかりぞ色ことなるしも*なつかしければ（袖口だけに違う色の下着の枇杷色をのぞかせて指示通りに着付けているのが殿にはまことに殊勝に感じられて）、涙ぐみたまひて（涙ぐみなさって）、　*此処の文は、歳末の衣配りを受けているに違いないので、それに即して言い換える。　*「なつかし」とは存外に簡素な表現に見えるほどで、此処では＜心ひかれる、好ましい、親しみがもてる、慕わしい、いとしい、かわいらしい＞と古語辞典に説明される気持ちの全てとさえ思え、万感の思いとも言えそうだが、あえて手紙の指示通りということから＜殊勝に思う＞とした。

「『*松が浦島』をはるかに思ひてぞやみぬべかりける（古歌にある『松が浦島』のような見事な此処の佇まいは尼君が愛でるものなのだから世俗者の私などは遠くで眺める他は無さそうですね）。昔より*心憂かりける御契りかな（貴方とは昔から思い通りに成らないご縁でした）。さすがにかばかりの御睦びは（それでもこうした御挨拶を交わすほどのお付き合いは）、絶ゆまじかりけるよ（絶やさずに来たのでしたね）」　*「松が浦島」は宮城県の松島湾公園の南西端に半島状に突き出た七が浜町に当たる地形のこと、らしい。宮城は陸奥の国府が置かれた地で、高級役人が赴任したことから、その景勝を歌に多く詠んだとされ、この「松が浦島」も歌枕として歌会に取り上げられた、との事。この物語でも、宮城野、末の松山、武隈の松、塩竈、などの歌枕が既に取り上げられて来た。それにそうした歌枕は畿内周辺の景勝地とは違って、実際に見知る者が少ないだろう陸奥国の地だから、多くの京都人が余計に遠くに理想化して憧れる、という作用は有り勝ちだ。また、注には「音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり」（後撰集雑一、一〇九三、素性法師）が参照歌として紹介されている。「止みぬべかりける」の＜諦めるしか無さそうだ＞という意味は、御方が尼だから最早手出しが出来ないということに掛けた殿の言い回しだから、この注解は必脚だが、この参照歌は「賢木」巻の藤壺宮の突然の出家後に光君が正月挨拶に訪れた際にも引き合いに出されていたので、よほど使い勝手が良いらしい。「むべも」の「むべ」は「宣（うべ）」の音表記で＜肯定する、納得する＞とあり、「も」は強調の係助詞＜確かに＞である、と共に省略された格助詞「に」を受けた構文であり、「むべにも」で＜なるほど是なら確かにうなずける＞の意味になる、と解す。よって引歌の歌筋は、「噂に聞いた松が浦島の絶景を今日やっと目にしたが、なるほどこの素晴らしさなら海人ならぬ風情を解する教養人の尼が住むというのも肯ける」、かと思う。この歌の背景は分からないが、詠み手に断ち難い尼への恋心が在ったらしいことは感じられる。この「松が浦島」を引き合いに出した殿の言い方という設定は、青ねずの一面の海に土色の重ね下着を袖口に覗き見た途端に、殿は空蝉の「待つが

心」を感じて袖の中の柔肌に欲情を覚えた、という含みなのだろう。当時の読者は之を読み流すだけで、きっとその臨場感を楽しんだに違いない。しかし私のような者でも、此処まで手間をかけて解凍すれば、その味わいの手掛かりくらいは感じ取れるというわけだ。有難いやら、情無いやら。　*「こころう」は＜懸念がある＝思うようにならない＞。此処では「おんちぎり」とあるから殿と御方の仲を言っているのだろうが、かねてから「すくせ」ということで空蝉が親に早く死に別れた不幸が「こころう」と語られていたので、そうした含みも有る言い方なのだろう。

などのたまふ(などと仰います)。尼君も、ものあはれなるけはひにて(尼君もさすがに感慨深そうに)、

「かかる方に頼みきこえさするしもなむ(こうして出家後にお世話をお頼み申し上げますことこそが)、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける(浅く無いご縁なのかと存じられ申し上げる次第です)」と聞こゆ(とお応え申し上げます)。

「つらき折々重ねて(浅く無い御縁とは言え、私が無理強いを重ねて)、心惑はしたまひし世の報いなどを(貴方の心を惑わせ申してしまった現世での罪滅ぼしを)、仏にかしこまりきこゆるこそ*苦しけれ(仏に頼み申す意味でのお世話焼きだとしたら情け無いものです)。思し知るや(お分かりでしょうか、)。かくいと素直にもあらぬものをと(私は斯くも実に素直に貴方を大事に思う一心でお世話申し上げているのだと。)、思ひ合はせたまふこともあらじやはとなむ思ふ(こう申し上げれば貴方には不実な男の存在に、思い当たる節も在ろうかと思われますが)」とのたまふ(と殿は仰います)。　*此処の論法にある、光君の自己正当化はアッパレと言う他は無い。それも、決して強がりではなく、王家の矛の尊い誇りを確信するが故の自負自信かと思う。そうした人生規範の価値観を共有する人々といったものを考えてみると、少し飛躍かも知れないが、だから王家レベルの国際社会の発展段階では戦争によってしか問題を解決できない、ような気もして来る。というのは多くの場合、王家による国家経営は家訓によって管理するのであり、家訓は教条宗教であり、軍事力・生産力・文化力などの総合国家力の実効支配が及ぶ範囲に於いて、結果的にその時点での世界認識を上手く説明するものだからである。

「*かのあさましかりし世の古事を聞き置きたまへるなめり(あの嘆かわしい義理の息子の無体があった昔の因縁のことを殿は聞いて心に留め置いていらっしゃるらしい)」と、恥づかしく(空蝉は家の不祥事をきまり悪がって)、　*「かの」は注に＜夫伊予介の死後に継子の紀伊守が言い寄ったということ。「関屋」巻にある。＞とある。逢坂の関で殿と御方が再会したのは、復帰の翌年の光君 29 歳の時のことだったので、今を遡ること 7 ～8 年前のことだが、夫の常陸介(かつての伊予介)の死去と継子の河内守(かつての紀伊守)の言い寄りの時期については、再会後間も無くのことではあったらしいが明示は無かった。空蝉の出家の直接の理由としては、その河内守の言い寄りを嫌ったという話で、やはり時期は不明ながらも「ふること」と言ってしまいたいことではあるのだろう。さらには尼君の二条東院入りの時期も不明だが、東院落成直後だとすれば 5～6 年前のことで、出家から間も無く移住したという一連の動向にも思える。であれば、河内守の言い寄りと御方の出家と東院入りは直線的な因果関係だから、当時その経緯を当然に相談された筈の殿にとっても、事の推移自体は「ふることをききおき」といった全くの他人事では元々無いようにも見える。であれば、この御方の言い方から感じられる「あさまし」さとは、河内守の相当に強引で執拗な迫り方のように思われ、表沙汰には出来ないものの実際には手籠めがあったことが強く疑われる。であれば、駆け込み寺を承知の上で殿は御方を東院に引き受けたのであり、事の秘匿という恩を河内守に売って、以って殿が彼家に絶対の服従を誓わせたという事情も有り得る。というか、それが同

時に殿に自制を強要する足かせでもあり、そうであってこその艶な話かとも思える。それも、空蝉は決して美形でも無く肉惑的でも無いと説明されていて、その上品さと高い節度こそが男の権勢欲を刺激するとのように語られる陰のある艶っぽさである。いや勿論、強姦は男の暴力であって押し込みであれば言語道断の一方的な犯罪なので、だからこそ事の露見は家の恥なのだろうし、貴家同士の力関係によっては家格や身分さえ失いかねない重大事になることであり、それを‘艶な話’という言い方は呑気で不謹慎に見える向きも有り得るだろうが、閉じた身分社会に生きる人々の血筋と義理がらみの近親相姦は、色恋と権勢をない交ぜにして何とか折り合いを付けて生きて行く以外には解決の方法が無い、という現実に有り得る人間関係の綾として認識されていたことが、この物語の前提ではありそうだ。

「かかるありさまを(殿の罪滅ぼしなど滅相も御座いません。却って私の身の上のこの事情を)御覧じ果てらるるよりほかの報いは(すっかり殿にお見知り置かれ為され申しておりますこと以上の面目ない罪滅ぼしなど)、いづくにかはべらむ(何処に御座いましょう)」とて、まことにうち泣きぬ(心底から泣きました)。

いにしへよりも(以前よりも)もの深く恥づかしげさまさりて(つつましく分際をわきまえた様子が増して)、かくもて離れたること(こうまで別世界の者として振舞うとは)、と思すしも(と殿は御方の卑下に強い印象をお持ちになって)、見放ちがたく思さるれど(抱いてやりたくお思いになったが)、はかなきことをのたまひかくべくもあらず(出家後家では背中を抱いて耳元に可愛い可愛いと口説き文句を仰り掛けるべき相手ではないので)、おほかたの昔今の物語をしたまひて(世情全般についての昔と今の比較などをお話し合いなさって)、「かばかりの言ふかひだにあれかし(せめて此れ位の話し甲斐のある人で在って欲しいものだ)」と、*あなたを見やりたまふ(末摘の部屋の方を見やりなさいます)。　*「あなた」は注に＜末摘花の方をさす。＞とある。確かに話の運びからすれば、そうらしい。が、そうなると再び各部屋の位置取りを確かめたくなる。作者はそこそこ詳しい間取りを説明することもあるのだから、余計に知りたくなる。が、分からない。いや、何も間取りで全てが分かるわけでは無いが、当時の社会認識や風俗事情についての基礎知識を持たない私にとっては、脱稿や省略があると驚くほど難解な文に突如出くわす事に成りかねず、実際に脱稿は少なからずありそうだし、省略も以前に作者自身が頭が痛いから以降は省略すると書いていて、冗談半分にしても半分は本当に省略がありそうで、今までに読解の困難は何度もあったが、特に此処数巻は何だかとても分かり難い物語に感じる。

*かやうにても(同様に)、御蔭に隠れたる人びと多かり(東院には殿のお世話で暮らす女たちが多く居ました)。皆さしのぞきわたしたまひて(殿は誰の所にも洩らさず正月の挨拶回りをなさって)、　*この文は、注に＜末摘花や空蝉以外にも源氏の庇護下にある女性が二条東院に多くいたことをいう。＞とある。それはそうなのだろうが、「かやうにても」とあるので、やはり末摘花や空蝉は以前と同じように北の対で局住みをしていたらしく思われる。だとすれば、なぜ末摘花と空蝉は特に話題とされたのだろうか。また、多いと言っても数え切れない筈は無いので、他の女たちにももう少し触れても良いだろうに。全員に衣配りもしたのだろうに、全省略か。一体、北の対の規模はどれ程だったのだろうか。かなり重要かと私には思える項目が、全く不明なままだ。不満だし、不可解だ。

「おぼつかなき日数つもる折々あれど(訪問やお手紙が行き届かない日が続くことも時々ありますが)、心のうちはおこたらずなむ(決して忘れては居ません)。ただ*限りある道の別れのみこ

そうしろめたけれ(ただし会えないで居る内に死別してしまうことだけは気懸かりです、ですからどうかご自愛下さい)。『*命を知らぬ』(人の「寿命は分からない」とは古歌にも在る通りです)」など、なつかしくのたまふ(などと優しく仰います)。　*「限りある道の別れ」は注に＜「限りある道の別れのみこそ悲しけれ誰も命を知らねば」（異本紫明抄所引、出典未詳）＞と参照歌引用がある。　*「命を知らぬ」は注に＜「ながらへむ命ぞ知らぬ忘れじと思ふ心は身に添はりつつ」（信明集、五〇）。＞と参照歌引用がある。

いづれをも(殿はどなたにも)、ほどほどにつけてあはれと思したり(その身分や身の上の事情に応じて深い愛情をお持ちでした)。我はと思しあがりぬべき御身のほどなれど(我こそは関白なりと猛々しくなさりそうな御身分の殿でしたが)、さしもことことしくもてなしたまはず(そのように偉ぶって女たちと接しなさらず)、所につけ(臨機応変に)、人のほどにつけつつ(相手の事情を考えて)、さまざまあまねくなつかしくおはしませば(それぞれの女たちの所で皆それぞれに親しんでいらっしゃったので)、ただかばかりの御心にかかりてなむ(ただそうした殿の御気持ちだけを頼りとして)、多くの人びと年を経ける(多くの女たちが東院で年月を過ごしました)。